

高等学校新学習指導要領に見られる国際バカロレアとの類似と相違

— 学習指導要領 外国語編とIB Language Bに着目して —

Similarity and Difference between the New Courses of Study (COS) for Senior High School and International Baccalaureate (IB)

— Focus on Foreign Language in COS and Language B in IB —

経済経営学部現代経営学科

三垣 雅美

MIGAKI, Masami

Department of Contemporary Business

Faculty of Economics and Business Administration

要約：本稿の目的は、新学習指導要領（平成30年告示）と国際バカロレア（IB）の共通点と相違点を明らかにすることである。エリクソン（2012）は、スキル、事実に基づく知識、概念から成る三次元的カリキュラム理論を提唱しており、IBは、これを基礎理論としている。新学習指導要領もまた、学力の3本柱、つまり①「知識・技能」の取得、②「思考力・判断力・表現力等」の育成、③「学びに向かう力・人間性等」の滋養を、すべての教科で育成を目指す「資質・能力」として掲げている。したがって、学習指導要領とIBにおいて、教育の枠組みとしての共通点が認められる。そこで、高等学校学習指導要領（外国語編）と国際バカロレアディプロマプログラム（言語B）に焦点をあて、共通点と相違点を整理した。その結果、相違点も見られたが共通点も多くあったことから、IB非認定の一条校であっても、IB教育を包摂することがわかった。

キーワード：学習指導要領、国際バカロレア、エリクソン、三次元的カリキュラム

Abstract： This paper focused on finding the similar and different points between the new courses of study offered by MEXT and the manuals by International Baccalaureate Organization (IBO), and clarified their affinity between two. Erickson (2012) shows a curriculum design by a chart with three axes; skills, knowledge and conceptual understandings, which IB curriculum is based on. As Erickson's three-dimensional model has three axes, the new courses of study (2018a) have also three main pillars; ① Acquisition of "Knowledge and Skills" ② Fostering "Thinking, Judgement and Expression skills" and ③ "Autonomous Learning and Humanity". These three pillars of the new courses of study by MEXT correspond to three axes of Three-Dimensional Curriculum Models by Ericson respectively. Therefore, it can be recognized that there is an affinity between the curriculum concepts of the Japanese courses of study and IB. Furthermore, it was discovered that there are several similar points between the courses of study (foreign language) and IB principle and practice. On the other hand, there are some differences. These findings reveal that because the new courses of study have many similar points with IB, the implements even in article one schools without IB authorization are constructed on almost the same base as IB education.

Keywords： Courses of Study, International Baccalaureate, Erickson, Three-Dimensional Curriculum

1. 本研究の背景と目的

日本国内の国際バカロレア (International Baccalaureate;

以下、IB) に関しては、「日本再興戦略—JAPAN is BACK—」(2013年6月閣議決定)を受け、国内での普及が進められてきた。数回の目標修正を経ながら、

2023年6月30日時点で211校となり、当初の目標であった認定校等数の200校¹⁾に達した。

一方、2018年3月に、新学習指導要領（文部科学省，2018a，2018b）が告示され、高等学校では2022年度から年次進行で適用されている。

2016年8月に文部科学省の中央教育審議会から提言された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（外国語）」では、「語彙・表現，文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼を置くのではなく，児童生徒の学びの過程全体を通じて，知識・技能を実際のコミュニケーションにおいて活用し，主体的に運用する技能が習熟・熟達に向かう」ように育成される必要があると述べられている。これは「習得した知識や経験を生かし，コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じ適切に表現すること」に課題があることを踏まえてのことである（早瀬，2017）。従来の外国語教育の中心を担っていた「知識」の習得だけでは不十分で，知識を「使える」段階までに持っていく実用的な訓練の必要性を強調していると言える。

このようななか，学習指導要領とIBを比較した研究が散見される。PYP段階におけるIBと学習指導要領における音楽教育に関して（安江，2017）やIBの理念やカリキュラムをMYP段階である前期中等教育に導入する利点や課題について，特別活動に注目して述べられたもの（渋谷，2013），学習指導要領とIBの教育理念の融合のさせ方について，IBの学習者像に着目したもの（梶井・後藤，2017）（赤羽，2018）等である。

同様に、「国際バカロレア（IB）教育の推進については，資質・能力（コンピテンシー）ベースの学習観をはじめ，学習指導要領と国際バカロレアには共通点が多い」という見解もある（日本教育新聞，2017，6098号）。

このように，双方に共通点を認める先行研究や社会的見地があるものの，教育現場の指導者からは，IBのカリキュラムや教育手法は，学習指導要領の下での教育と乖離しているという声もある。現場の教員に説得力を持って受け入れられていない状況は看過できない課題である。

そこで，本研究の目的は，新学習指導要領を紐解き，IBとの類似と相違について考察する。特に，IBとの比較検討においては，言語習得つまり英語教育における改訂に着目することが有用であると考え，高等学校の新学習指導要領のうち外国語科に注目し，教科

のねらいやカリキュラム，その他教育手法について検証する。

2. エリクソン（Erickson）の三次元的カリキュラム理論と中村のモデル

IBが基礎理論としているErickson（2012）は，「事実に知識（Facts）」と「スキル（Skills）」から成る二次元的カリキュラムと「事実に知識」「スキル」に加えて「概念（Concepts）」から成る三次元的カリキュラムを提唱している。

中村（2019）は，エリクソンのカリキュラム理論を考察し，図1，図2のように図示している。

まず，X軸を「スキル」，Y軸「事実に知識」とするモデルで，「スキル」と「事実に知識」の育成に重点を置く二次元的カリキュラムである（図1）。この二次元的カリキュラムでは，学習者の視界は平面上にあり，各教科の枠の中で，知識の習得に焦点が当てられている。よって，学習者は現実社会で知識が活用できる場面が見いだせず，表面的な理解や単純なスキルの習得で終わってしまう。

そこで，Z軸「概念」を加えると，三次元的カリキュラムとなる（図2）。三次元的カリキュラムでは，学習者は立体的な視野を獲得し，二次元的カリキュラムで断片的であった知識を各教科の枠組みを越えて，体系立てて理解することが出来る。学習者は「概念」を獲得することによって，既存の知識を結び付け，主体的な学びへと発展させる。さらに，学習者は概念によって知識を転移させたり応用させたりすることが出来るようになる（中村，2019：22）。

以上をまとめると，学習者は各教科で得られた知識を統合し，スキルを持って実動させていくが，その際に俯瞰してとらえる視点，つまり概念によって，教科横断的な応用力と，未知の問題に対する解決能力を発揮することが出来るようになると思われる。

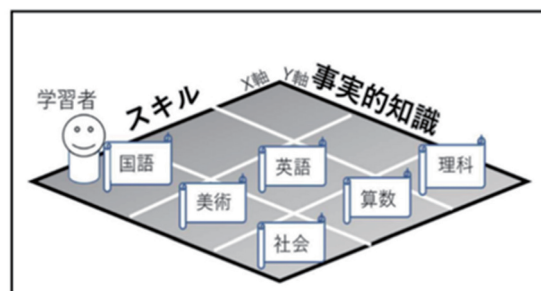


図1 二次元的カリキュラム構造
出所：中村（2019，p.22）

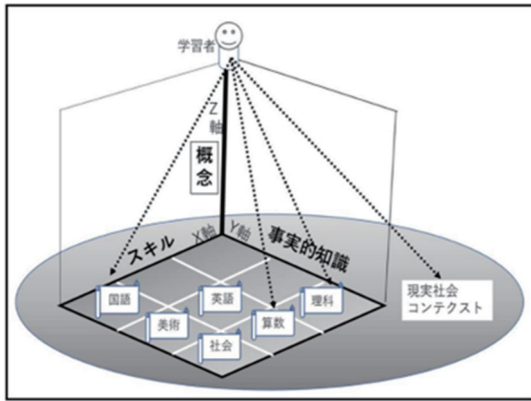


図2 三次元的カリキュラム構造
出所：中村 (2019, p.22)

3. 比較対象と方法

3.1. 比較対象

本研究で分析対象とする学習指導要領と国際バカロレア機構 (International Baccalaureate Organization; 以下, IBO) の手引書等は以下の通りである (表1)。

表1 比較対象

発行元	発行年	タイトル
文部科学省	2018a	高等学校 学習指導要領 (平成30年告示)
文部科学省	2018b	高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編
IBO	2009	The Diploma Programme: From principles into practice
IBO	2018	Diploma Programme Language B guide

出所：筆者作成

3.2. 比較方法

本研究では、前節で挙げた資料分析を主とし、学校教育法第1条で規定されている学校 (以下, 一条校) やIB認定校での実践状況を加味しない。IBの教育基盤である三次元的カリキュラム理論や学習の手引きと比較しながら、学習指導要領の項目や記述を引用し、両教育基盤の類似と相違を論考する。

4. 新学習指導要領の3つの柱と三次元的カリキュラム理論

平成30年告示の学習指導要領 (文部科学省, 2018a) では、知識の理解を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、すべての教科で育成を目指す「資質・能力」に関して3つの柱が整理された。3つの柱とは、以下の通りである。

- ①「何を理解しているか、何ができるか」(生きて働く「知識・技能」の習得)
- ②「理解していること・できることをどう使うか」(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」(学びを人生や社会に活かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の滋養)

したがって、新学習指導要領の3つの柱を、エリクソンの三次元的カリキュラムにおける各軸ではどれに相当するか整理すると以下ようになる (表2)。

表2 国際バカロレアと新学習指導要領における資質・能力に関する比較

国際バカロレア		新学習指導要領	
三次元的カリキュラム理論		3本柱	
スキル	X軸	②	思考力・判断力・表現力等
		①	技能
事実的知識	Y軸	①	知識
概念	Z軸	③	学びに向かう力, 人間性等

出所：筆者作成

三次元的カリキュラムにおけるX軸「スキル」は、新学習指導要領における②「思考力・判断力・表現力等」と①「知識・技能」の中の「技能」だけを抽出した。また、Y軸「事実的知識」は、新学習指導要領における①「知識・技能」の中の「知識」だけを抽出した。また、Z軸は、学習指導要領の中の③「学びに向かう力, 人間性等」が該当すると考えられる。

よって、学習指導要領において、新しく整理された3本柱は、それぞれエリクソンのカリキュラムの3軸に相当する。したがって、新学習指導要領はIBのカリキュラム構成と類似性があると言える。

5. 高等学校新学習指導要領（外国語編）におけるIBとの類似と相違

5. 1. 三次元的カリキュラムのZ軸「概念」に関わる箇所

高等学校外国語科では、3つの柱に基づき、外国語を使って何ができるようになるかを明確化するにあたり、育成すべき内容が示されている。すなわち、「知識及び技能」とは、音声・語彙・表現・文法・言語機能などに関する知識とそれらを実際に使うことのできる技能、「思考力、判断力、表現力等」とは、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて、見聞きした情報を理解・内在化しながら、外国語で表現したやり取りできる能力、さらに「学びに向かう力、人間性等」は、主体的、自律的に外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度を含むとしている。

よって、高等学校新学習指導要領（外国語編）（文部科学省、2018b）における三次元的カリキュラムのZ軸に関わる記述を抽出していく。

5. 1. 1. 三次元的カリキュラムに値する箇所

「（前略）、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」は、（1）「知識及び技能」及び（2）「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力を一体的に育成する過程を通して育成する必要がある。」

（高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.17

下線部は筆者）

上記のように、三次元的カリキュラムのX軸とY軸の両軸に言及し、Z軸にあたる「学びに向かう力、人間性等」の育成を三位一体で行うことが強調されている。

5. 1. 2. 三次元的カリキュラムZ軸「概念」に値する箇所

第1章第1節2改訂の基本方針の中に、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が述べられている。授業改善の留意点が5点挙げられており、特に4番目は以下の通りである。

「④ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等

ならでは物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。」

（高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.4

下線部は筆者）

上記のある各教科等の「見方・考え方」は教室での学習と社会をつなぐものとされており、これはZ軸の「概念」に値するものと捉えることができる。

次に、外国語科としての「見方・考え方」、つまり外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方について、整理していく。まず、「見方・考え方」についての定義が述べられている。

「外国語によるコミュニケーションにおける「見方・考え方」とは外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」」

（高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.12

下線部は筆者）

つまり、目標言語である外国語（大抵の場合は英語）を学習して得た事実に知識を、コミュニケーションスキルとして活用しながら、どのような思考力を育てていくことを目標としているのかが述べられている。そして、概念にあたる箇所が、上記の部分以降に記載されている。

「この「見方・考え方」を確か豊かなものにすることで、学ぶことの意味と自分の生活、人生や社会、世界の在り方を主体的に結び付ける学びが実現され、学校で学ぶ内容が生きて働く力として生まれることになる。さらに、こうした学びの過程を実現することが、外国語教育における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につながる。」

（高等学校学習指導要領解説 外国語編

p.p.12-13 下線部は筆者）

以上のように、新学習指導要領（外国語編）には、IBが基盤としているエリクソンの三次元的カリキュラムの3軸に相当する基本方針が存在することが確認出来た。特に、教科横断的な学習によって得られる深い学びの「見方・考え方」は、外国語教育における「概念」の修得をねらいとして、授業改善を提言している。

5.1.3. 取り扱う話題について

教材の中で、取り扱う話題についても詳細に言及されている。

「高等学校ではどの科目においても「日常的な話題」及び「社会的な話題」を扱う。(中略)社会的な話題とは、広く国内外で起こっている事象など社会で起こっている出来事や問題に関わるものであるが、日常的な話題と同様に、生徒の発達の段階や習熟の状況などに応じて、高校生にとって興味・関心のある話題を取り上げながら、徐々に、時事的な話題や学術的な話題で、より抽象度が高い内容や詳細で具体的な情報などを扱っていくことが考えられる。」

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.18)

下線部は筆者)

三次元的カリキュラムZ軸の「概念」を実現するために、教室で行われるドリル練習や練習するためだけの「架空の設定」ではなく、より身近で日常で起こりうる設定を行うよう述べている。さらに、学校外での応用を踏まえ、時事問題や学術面での応用へ範囲を広げ、実用的な運用を踏まえている。

5.2. IBの特徴的な教育手法との類似箇所

教科横断的な学び、評価方法等、IBには特徴的な教育手法がある。

よって、先述の三次元的カリキュラムZ軸「概念」以外で、類似していると考えられる新学習指導要領（外国語編）の該当部分を整理していく。

5.2.1. 教科横断的な学習について

新学習指導要領（外国語編）では、「言語活動における国語科との連携」が記載されている。

「(7) 言語能力の向上を図る観点から、言語活動などにおいて国語科と連携を図り、指導の効果を高めるとともに、日本語と英語の語彙や表現、論理の展

開などの違いや共通点に気付かせ、その背景にある歴史や文化、習慣などに対する理解が深められるよう工夫をすること。」

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.128)

下線部は筆者)

国語教育と英語教育は、共に言語能力の向上を目指すものであるため、共通する指導内容や指導方法を扱う場面がある。よって、この配慮事項は、各学校において国語科と英語科の指導内容や指導方法等を適切に連携させることを促したものである。このように、コミュニケーションを図る資質・能力が自然にかつ効果的に培われるように、言語習得における教科横断的学習について言及されている。

5.2.2. 他教科等で学習した内容との関連付け、教科横断的学習に関する記述

「(8) 言語活動で扱う題材は、生徒の興味・関心に合ったものとし、国語科や地理歴史科、理科など、他の教科等で学習した内容と関連付けるなどして、英語を用いて課題解決を図る力を育成する工夫をすること。」

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.129)

下線部は筆者)

国語科との連携については、同じ種類の言語活動を通して、より幅広い、深遠なアウトプットを目指して行われる活動が想定されていた。一方で、配慮事項(8)では、より広域での教科横断性が想定されている。たとえば、地理歴史科との連携で、世界各地で見られる地球環境問題、資源・エネルギー問題、人口・食料問題などについて学習した内容と関連する話題について、外国語科で取り上げ、議論する例や、理科との連携で、生態系のバランスと保全について学習した内容を想起しながら、関連する英語の文章を読むなどの例が挙げられていた。

5.2.3. 統合的な言語活動を行うための改定「4技能」から「5領域」へ

IBのシラバスアウトラインではCommunication skillは、Receptive skillsとProductive skillsに加えて、Interactive skillsを包括している(図3)。

日本の従来の英語教育では、Receptive skillsはリーディングとリスニング、Productive skillsはライティングとスピーキングと区分されていたが、この度の改

訂により従来の4技能の中の「スピーキング」が「やりとり (interaction)」と「発表 (production)」の2領域に分けられ、全体で「5領域」という設定になった。



図3 IBのシラバスアウトライン
出所：Language B guide (2018, p.17) を参考に筆者作成

早瀬 (2017) は、改訂により5領域になったのは、グローバル化の時代には「表現力」が求められ、とりわけ高等学校での「言語活動の比重が低い現状を改善するため」と述べている。

5.2.4. 新科目「英語コミュニケーション」と「論理・表現」の創設

現行の指導要領にある「コミュニケーション英語ⅡⅢ」が「英語コミュニケーション」と改名された。さらに、現行の「英語表現」が新科目「論理・表現」となった。「英語コミュニケーション」は、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」を総合的に扱い、より内容面に突っ込んで総合的・統合的な指導を目指す科目とされている。

一方、従来の「英語表現」が依然として、文法や言語の構造の習得に重点が置かれていたため、「論理・表現」は「発信能力の育成をさらに強化」し、「発表、討論・議論、交渉」などにおいて、聞いたり読んだりして書いたりする統合型の言語活動」を目指すものとなった。

改訂の結果、4技能5領域となり、総合的・統合的な指導を目指し、より発信能力の育成を目指した科目の誕生は、IBのEnglish Bに見られるようなコンテンツベースの授業展開に類似することになった。

5.2.5. 学習評価の充実 国際的な指標CEFR (=Common European Framework of Reference for Languages) の導入

IB教育では、各プログラムにおける評価の手順が厳格に示されている。加えて、各教科のサブジェクトガイドにはassessment outlineが記されており、Criterion A:Language / Criterion B:Message / Criterion C:Conceptual understandingそれぞれにMarksが定められている。よって指導者や採点者によって採点基準が異なるわけではなく、この厳格な基準に沿って採点される。また、採点者が同じような判断ができるよう研修や研鑽を積み、採点者やテーマなどで評価がぶれないようにされている。

従来の学習指導要領では、評価活動や評価基準についての詳細な言及はなく、評価については各指導者、各学校に委ねられていた。

そこで、新学習指導要領では国際的な指標CEFRを導入し、国際的な基準で目標設定を行うことになっている。

5.2.6. 多様性に対する寛容さ

「IBの使命」の中で、「IBは、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて」と書かれてあり、多様性や人が持つ違いについて認めあう精神が貫かれている。一方、新学習指導要領での記述は以下の通りである。

「(4) 現代の標準的な英語によること。ただし、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮すること。」

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.133

下線部は筆者)

「様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮する」と記述されており、現代の英語は、世界で広くコミュニケーションの手段として使われている実態があるが、語彙、綴り、発音、文法などに多様性があるということに気付かせる指導を行うよう留意点が述べられている。

5.2.7. 協働学習

IBでは、協働学習に重点が置かれている。

一方、新学習指導要領では、協働学習について以下のように述べられている。

「(7) 生徒が発話する機会を増やすとともに、他者と協働する力を育成するため、ペア・ワーク、グループ・ワークなどの学習形態について適宜工夫すること。」

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.137

下線部は筆者)

ペア・ワークやグループ・ワーク等の様々な学習形態は、「生徒が発話する機会」を増やしたり「他者と協働する力を育成」したりすることができるようにする。よって、新学習指導要領では、様々な形態のコミュニケーションを通して、互いに学び合える環境を整備していくことの重要性が明文化されている。

5.2.8. ICTツールの活用

IBでは、ICTツールの積極的な活用を促している。ICTツールの活用の活性化とスキルの習得は、今日の学校教育において避けられない課題となっている。

よって、学習指導要領の今回の改定において、注目すべきは以下の部分である。

「(8) 生徒が身に付けるべき資質・能力や生徒の実態、教材の内容などに応じて、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、生徒の興味・関心をより高めるとともに、英語による情報の発信に慣れさせるために、キーボードを使って英文を入力するなどの活動を効果的に取り入れることにより、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること。」

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.135

下線部は筆者)

上記の配慮事項の後の解説部分では、指導に当たって、ICT活用をどのようにすべきか具体的に、かつ詳細に解説している。

「指導に当たっては、視聴覚教材やその他の教育機器を有効活用することは欠かせない要素である。写真や映像などを見せることで、理解を促進し、現実感や臨場感を与え、学びの動機付けやきっかけを与えることができる。④また、インターネット等を活用することで、学校外へと広がる、現実との結び付きの濃い発展学習を実現することができる。音声面でも、教師やALT等の使う英語だけではなく、⑤様々な英語音声に触れる機会をもつことは、国際

共通語としての英語に対する理解を深め、同時に自分自身の英語に対する自信を深めていく上でも大切である。(中略)このような活動を通して、⑥生徒一人一人が主体的に世界と関わっていきこうとする態度を育成することもでき、教育機器は外国語科における指導にとって大切な役目を果たすものとして考えられる。」

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.4

下線部と④⑤⑥は筆者)

上記の解説部分には、ICTツール活用の有効性の他、三次元的カリキュラムZ軸「概念」に値する箇所(④と⑥)多様性に対する寛容さ(⑤)も含まれ、ICTツールの活用を通して、他の点でもIBに共通する部分を持っていることがわかる。

6. 高等学校新学習指導要領(外国語編)におけるIBとの相違

新学習指導要領を紐解くと、IBの教育カリキュラムや教育手法に類似した部分が見られた。しかし、両者に共通しないものもいくつかあることがわかった。

6.1. 国際バカロレアにあって新学習指導要領にないもの、あるいはほとんど記述のないもの

6.1.1. 振り返りについて

IBでは、メタ認知を重要視している。メタ認知とは、学習者が自己の学習及び実績を現実的に評価し管理することであり、振り返りをする思考法や態度である。振り返りを行うことによって、効果的な学習を行うことができると以下のように述べている。

“Learning how to become an effective learner requires students to realistically evaluate and regulate their own learning and performance. “Metacognition” is a term used to refer to reflective thinking strategies, attitudes and other competencies used to monitor and control learning. Metacognitive strategies and skills can be nurtured in a supportive learning environment that focuses on the affective as well as cognitive competencies identified in the learner profile. In order to become independent learners, students need to develop powers of reflection, self-confidence and self-awareness, a willingness to communicate ideas

without fear of losing face, and a willingness to take risks and be open-minded.”

(IBO (2009) The Diploma Programme: From principles into practice p.37)

一方、学習指導要領では、振り返りについて言及されているものは以下の部分である。

「③ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、生徒が考える場面と教師が教える場面とをどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。」

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.4

下線部は筆者)

これ以上の詳細な記述や具体的な例示はなく、IBにおけるリフレクション活動に匹敵するものになり得るかは、教師の力量に委ねられることになる。

6.1.2. 知の理論と批判的思考について

IBのEnglish Bサブジェクトガイドには以下のような記述がある。

“Language B and the core

・transferring the critical-thinking process explored in TOK to the development of well-supported arguments in written text types, such as a speech or report”

(IBO (2018) Diploma Programme Language B guide p.7)

上記の通り、知の理論 (Theory of Knowledge ; 以下、TOK) で育成された批判的思考のプロセスが、言語習得Bにおけるライティング活動に寄与することが述べられている。さらに、上記に続くLanguage B and theory of knowledgeにおいて、次のように記述されている。

“..... the skills and wider conceptual understandings that students develop in TOK can make an extremely positive contribution to their study of language acquisition. TOK develops higher-order

thinking skills, such as analysis and evaluation, and also helps students to make connections and comparisons across their subject areas and the DP core. In this way, language acquisition both supports and is supported by TOK.”

(IBO (2018) Diploma Programme Language B guide p.8)

TOKで育まれたスキルや概念理解が言語習得の学習へ多大な貢献をすること、TOKは高次思考力を育成し、生徒が各教科とコア科目間の接続や比較をする一助を担い、言語習得とTOKは相互補完的な関係であることを示している。

一方で、TOKに値する科目が高等学校の教育課程にないため、TOKと外国語科のつながりに類似する指導や教育活動は学習指導要領に記されていない。

また、批判的思考については、IBのEnglish Bサブジェクトガイドには以下のように、言語習得と探究活動が批判的思考の育成に関わることが述べられている。

“Language acquisition aims

6. Provide students, through language learning and the process of inquiry, with opportunities for intellectual engagement and the development and the development of critical- and creative-thinking skills.”

(IBO (2018) Diploma Programme Language B guide p.13)

一方、新学習指導要領では「思考力・判断力・表現力」というキーワードは随所に見られる。しかし、新学習指導要領 (外国語編) の中で、「批判的思考 (力)」という用語は登場していない。「思考力・判断力」の中に「批判的思考 (力)」も包括されるとみなすのか、「批判的思考」についての概念や定義が明確でないために、新学習指導要領に記載してないのか、いずれにしても重要なキーワードの欠落に乖離を感じる。

6.2. 新学習指導要領にあって国際バカロレアにならないもの

6.2.1. 語彙数について

新学習指導要領では、実際のコミュニケーションについて必要とされる語彙を中心に、学習者が習得すべ

き語彙数について以下のように明示している。

表3 新学習指導要領（外国語）における目標語彙数

高等学校教育課程全般： 小学校及び中学校で学習した語に1,800～2,500語程度 の新語を加えた語
英語コミュニケーションI： 小・中学校で学習した語に400～600語程度の新語を 加えた語
英語コミュニケーションII： 英語コミュニケーションIに700～950語程度の新語 を加えた語
英語コミュニケーションIII： 英語コミュニケーションIIに700～950語程度の新語 を加えた語

出所：文部科学省（2018b）を参照し筆者作成

一方、IBにおいては、言語習得はコンテンツベースで行われる。よって、学習者が目標言語で、思考したり表現したりする中で必要とされる語彙を身に付けていくのであり、習得されるべき語彙数という概念はない。

6.2.2. 文法の指導について

今回の改訂において、新学習指導要領では、文法学習について以下のような立場をとっている。

「(3) 文法事項の指導に当たっては、文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、過度に文法的な正しさのみを強調したり、用語や用法の区別などの指導が中心となったりしないよう配慮し、…」

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 p.4)

下線部は筆者)

文法事項の指導上の位置付けが示されており、実際の活用をより重視するよう述べられている。まずコミュニケーションを行う目的や場面、状況などを設定した上で、それぞれの言語活動に必要な文法事項を提示する。そこで実際のコミュニケーションにおける文法事項活用の必然性に生徒が気付くよう指導するとされている。

むろんIBサブジェクトガイドでは、文法指導の在り方や文法の正確さを問う姿勢はない。

よって、両者の間には、依然として大きな乖離があ

ると言えるが、日本の英語教育において、実際のコミュニケーション活動の中で文法の精度を高めていく帰納的学習法へシフトしつつあることが見てとれる。

7. 本研究の成果と示唆

本稿は、高等学校新学習指導要領とIBとの類似と相違について具体的な個所を挙げて整理した。IBのカリキュラムや教育手法と、新学習指導要領の複数箇所共通点があり、類似性を認めることができた。よって、両者は共通の教育基盤の上に構築されていることが示せたと言える。よって、たとえIB認定校でなくとも、一条校として文部科学省告示の学習指導要領に沿って教育活動を行えば、IB教育を包摂することになる。

一方、相違点もあった。IBに独特なものは振り返り活動とTOKであり、学習指導要領（外国語編）に独特なものは語彙数と文法指導についてであった。本編にあたる学習指導要領（2018a）では、3つの柱が設定され、「知識・技能」だけでなく、「学びに向かう力・人間性等」が組み込まれた。つまり、エリクソンのX軸・Y軸・Z軸すべてを包含していた。しかし、教科指導の基盤となる学習指導要領（外国語編）（2018b）では、Y軸にあたる「事實的知識」つまり語彙や文法について詳細な記述があるものの、Z軸「概念」にあたる学習を俯瞰して捉える振り返り活動や批判的思考育成についての記述が欠けていた。

以上から、学習指導要領（2018a）ではIBと類似し、共通の教育基盤に構築されているものの、各教科の部分では、Y軸の部分も多く、IBにあるZ軸の項目が十分でないことが明らかになった。よって、新学習指導要領の教科指導の上では、依然として「知識」を重視する姿勢もとられているということである。

8. 今後の課題

今後の課題は以下の2点が挙げられる。1つ目は、現行のものも含めて、過去の学習指導要領と当時の教育施策を照らし合わせ、改訂の歴史を検証することである。過去の学習指導要領の変遷を整理しIBと比較すれば、日本の教育施策がどのように変化し、IBとどの程度、融合してきたかを明らかにすることが出来るだろう。

2つ目は、IBサブジェクトガイドの改訂を紐解くことである。IBもまた、数年ごとに改訂があり、扱

う題材や評価の仕方に変更がある。よって、改訂を時系列に整理することは、今後、グローバルに活躍する人材の教育について示唆を得ることが出来るだろう。

今後も、学習指導要領を丁寧に読み解くことによって、IBとの融合を検証し、日本でのIB推進に貢献したい。

注

- 1) 日本国内にあるIB認定校等の数であり、インターナショナルスクール、一条校を含む。1校で複数のIBプログラムを持つ学校もあり、2023年6月30日時点では、プログラム毎に、PYP認定校59校、候補校32校、MYP認定校35校、候補校11校、DP認定校67校、候補校7校である。

参考文献

赤羽寿夫 (2018) 「IB教育と学習指導要領に関する基礎的研究：IB教育カリキュラム導入に向けて」『東京学芸大学教職大学院年報』 6, 13-24.

梶井芳明・後藤由季奈 (2017) 「学習指導要領と国際バカロレア教育の教育理念の融合のさせ方に関わる探索的調査研究 (1)」『日本教育心理学会第59回総会発表論文集』 616.

国際バカロレア機構 (2009) The Diploma Programme: From principles into practice

国際バカロレア機構 (2014) DP：原則から実践へ

国際バカロレア機構 (2018) Language B guide First assessment 2020

渋谷真樹 (2013) 「日本の中等教育における国際バカロレア導入の利点と課題—特別活動に着目して—」『奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要』 22, 87-94.

中村純子 (2019) 「国際バカロレアが目指す概念理解と国語科での指導の可能性」『東京学芸大学国語教育学会研究紀要』 15, 20-29.

日本教育新聞 (2017) 6098号

早瀬博範 (2017) 「次期学習指導要領が目指す英語教育の展望と課題」『佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要』 1, 115-126.

文部科学省 (2018a) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示)』 文部科学省.

文部科学省 (2018b) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編』 文部科学省.

文部科学省IB教育推進コンソーシアム

<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/>

authorization/ (2023年8月30日閲覧)

安江真由美 (2017) 「音楽教育におけるファシリテーターの役割：国際バカロレア (IB) 初等教育プログラム (PYP) と小学校学習指導要領の比較をもとに」『愛知学泉大学・短期大学紀要』 52, 101-110.

Erickson, H.L. (2012) *Concept-based teaching and learning*. Introduction to IB position papers: International Baccalaureate Organization